

第3種郵便物認可



障害者の「生活情報」をまとめた「記録」作成を広めようといわれたシンポジウム
—横浜市港北区の横浜ラポール

親亡き後もサポート 障害者の生活記録普及へ

横浜

障害のある子どもを持つ親たちが「親亡き後」に向け必要な生活情報をまとめた「記録」の作成を広めようというシンポジウムが2日、横浜市港北区鳥山町の横浜ラポールで開かれた。

横浜市内のNPO法人や母親グループが取り組み事例を紹介。専門家も「今の生活実態を支援者らに知ってもらうためにも有効」と作成を呼び掛けた。

シンポは、横浜市内の障害福祉関係団体でつくる「セイフティネットプロジェクト横浜」などの主催で、障害者の親や関係者約220人が参加した。

「親心の記録」として全国で初めて「記録」を作成した「船橋市手をつなぐ育成会」の赤津保子さんが基調講演。親が急逝し子どもの生活状況が全く分からない

くなったケースの相談を受けたことから、記録作りに取り組み2008年1月に完成、全国に広がっているという。

続いて行われたパネルディスカッションで、船橋版を基に改良を加え独自に「あんしんノート」を作ったNPO法人「ゆうの風」の石野えり子さんと「三人の根岸満恵さんは、それぞれ「本人と親の思いをつなぐ意味でも大事」「書くことで自分の頭の中が整理できた」と強調した。

コーディネーターを務めた県立保健福祉大学の谷口政隆名誉教授は、「記録は障害者の生活を第三者に知ってもらう道具になり、『親亡き後』にとどまらず、地域社会で暮らすための懸け橋になる」と話した。

(佐藤 奇平)